

日本近代 历史人物考究

朱晓凡 著



浙江工商大学出版社



浙江省教育厅一般科研项目资助（项目号：Y201737186）

日本近代历史人物考究

朱晓凡 著



浙江工商大学出版社 | 杭州
ZHEJIANG GONGSHANG UNIVERSITY PRESS

图书在版编目(CIP)数据

日本近代历史人物考究 / 朱晓凡著. —杭州:浙江工商大学出版社, 2018.5

ISBN 978-7-5178-2745-0

I. ①日… II. ①朱… III. ①历史人物—人物研究—日本—近代 IV. ①K833.130.4

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2018)第100549号

日本近代历史人物考究

RIBEN JINDAI LISHIRENWU KAOJIU

朱晓凡 著

责任编辑	董文娟 姚 媛
封面设计	林朦朦
责任印制	包建辉
出版发行	浙江工商大学出版社 (杭州市教工路198号 邮政编码310012) (E-mail: zjgsupress@163.com) (网址: http://www.zjgsupress.com) 电话: 0571-88904980, 88831806(传真)
排 版	杭州朝曦图文设计有限公司
印 刷	杭州恒力通印务有限公司
开 本	880mm×1230mm 1/32
印 张	8.625
字 数	216千
版 次	2018年5月第1版 2018年5月第1次印刷
书 号	ISBN 978-7-5178-2745-0
定 价	26.00元

版权所有 翻印必究 印装差错 负责调换

浙江工商大学出版社营销部邮购电话 0571-88904970

はじめに

田中角栄は、一九一八年(大正七年)五月四日新潟県に生まれ、郵政大臣(一九五七年七月～一九五八年六月)、大蔵大臣(一九六二年七月～一九六五年六月)、自由民主党幹事長(一九六五年六月～一九六六年一二月、一九六八年一月～一九七一年七月)、通産大臣(一九七一年七月～一九七二年七月)、総理大臣(一九七二年七月～一九七四年一二月)などの要職を歴任した日本人政治家である。その間、田中は、内政において高度経済成長期を創出し、自民党長期安定政権の土台を築き、外交においては日米繊維問題の解決、対中国交正常化交渉の中心人物となる等、第二次世界大戦後の日本の形を創った人物の一人である。しかしながら、田中は、強力な政治指導で対中国交正常化を実現させたことから、中国では「井戸を掘った恩人」と高く評価されているのに対し、日本では「金権政治家」としてのマイナスイメージがなお強い。

田中は、一九七六年七月にロッキード事件で逮捕され、一九八三年一〇月に有罪判決を言い渡された。そのことから、一九八〇年代の田中研究においては、田中は、「金権政治」というマイナス面や、自民党の利益誘導政治の形成者としての面ばかりが

強調され、巨額な政治資金が彼の政治指導力の原動力であったとして、政治家としては低く評価されていた。その中で最も代表的なのは、立花隆の研究である。立花の研究により、田中政治そのものが「金権政治」として定義づけられ、それ以降、厳しい批判の対象となっていく。立花の研究は大きな反響を呼び、田中首相退陣のきっかけになったとされ、その後、「金権政治家」としての田中像が定着していき、今日に至っている。他のジャーナリストによる研究も、田中が「土建国家」「開発政治」「族議員政治」の元祖であると評し、彼を「目白の闇将軍」「キングメーカー」とし、金権政治を象徴する政治家として位置づけ、立花の提示した田中像の延長上で描かれてきた。

それらの研究は、史料制約の中で、専ら「金権政治」に焦点に当てて議論を展開しており、政党政治家としての田中の政治指導、政治手法やその意義を十分に考察したとはいえない。「そもそも政治理念がない、政治指導力不足」という従来の田中に対する低い評価では、選挙活動、議員立法、テレビの大量予備免許の許可、『都市政策大綱』の作成、日米繊維問題の解決、対中国交正常化の実現という田中政治の数々の業績を論理的に説明することができない。また、田中の政治的指導力に関しては、田中の秘書であった早坂茂三の回想録がしばしば用いられる。それは、早坂でなければ入手できない田中の証言や演説が多数含まれているものの、早坂が田中の発言等を長期的視野の中で十分に理解しきれていたとはいえないので、田中の政治的発想力、構想構築能力、政治指導力に関して適切に評価されていたとはいえない。最近、田中と同時代に活躍した大平正芳についての研究が進み、彼の著作集の編纂が行われ、静かな「太平ブーム」となっている。しかし田中は、戦後日本政治外交史における代表的政治家の一人としてしばしば挙げられ、また彼を主題にした書籍も

多数出版されているものの、対中国交正常化を成し遂げた大物政党政治家としての田中を本格的な伝記的研究の対象とされたことはあまりない。

対中国交正常化に関する研究は多数行われてきた。近年、新しい史料や当時者からの聞き取り調査を駆使し、田中の対中国交正常化交渉における政治指導を分析した本格的な研究が登場した。服部龍二は、『対中国交正常化―田中角栄、大平正芳、官僚たちの挑戦』（中公新書、二〇一一年）の中で、田中が日中国交回復を決断するや、大平正芳外相と外務官僚に対中国交正常化交渉を任せ、国交回復に邁進する田中の強力な政治指導を描いた。その上に、「中国との劇的な国交正常化を成し遂げたのが、田中と大平のリーダーシップであった」「日中講和を導いたのは田中と大平の強烈な個性であった」こと等を解明した。しかし、田中の政治家としての台頭や、政治構想および政治手法と関連づけ、対中国交正常化が、田中論として十分に位置づけられていたとはいえない。

田中の伝記的研究では、早野透の『田中角栄―戦後日本の悲しき自画像』（中公新書、二〇一二年）の出版によって大きく進展した。同著書は、田中の生涯を描いたものであり、番記者として田中に密着した早野ならではのエピソードに満ちており、田中の懐の深い人間性がより鮮明に打ち出された。にもかかわらず、田中が成し遂げた最も大きな功績といえる対中国交正常化については、田中政治における位置づけの中で、本格的に論じられているとはいえない。

また、近年、新聞の記事等の再検証によって、田中政治に関する様々な情報が見直され、政治家としての田中を実証的に評価する研究も誕生した。下村太一は、田中が佐藤栄作内閣における土地・住宅問題、農業政策、工業再配置政策への対応を研究

し、マスメディア活用に優れ、利害対立の巧みな調整能力を発揮し、政策構想を魅力的に提示する能力に長けていた点に着目し、内政において明確なビジョンを持つ政治家として評価した。しかしながら、下村の研究は田中の個別の内政政策の分析にとどまり、研究対象とした期間も佐藤内閣期に限られている。そのため、自民党権力の中で、長期にわたり、田中がどのような政治構想を構築し、いかに政治的指導力を発揮して台頭してきたのかについては、十分に論じられていない。

拙著は、以上の先行研究が十分に検討していなかった部分を焦点に当て、以下の視角に基づいて田中角栄という人物を考察するものである。

第一に、拙著は、田中角栄の政治思想と政治スタイルを検討する。田中は、一九四七年に二九歳で政界入りを果たした。外交において田中は、対米協調路線を堅持した上で、対中国交正常化の実現を目指し、アジアにおける国際社会との協調の中で日本の発展を図ろうにした。内政においては、「国土復興」と「格差是正」の実現に強い情熱を持っていた。田中は、岸信介、池田勇人や佐藤栄作らの下で成長し、一九七二年、佐藤栄作の後継者をめぐる争いで福田赳夫を破り、一気に対中国交正常化を実現させ、田中政治の最高潮を迎えた。拙著は、このような田中の政治思想がいつ芽生えたのか、どのように展開していったのかについて見ていく。また、拙著は、田中の政治人生を通じて培われ、後に対中国交正常化交渉において余すところなく発揮された。慎重な根回し、官僚の使いこなし、迅速な行動力を柱とする政治スタイルについて見てみる。また、田中の中国観の背景を探る中で、これまであまり論じられてこなかった田中の対中構想と内政における「国土復興」「格差是正」という政治理念との関連にも注目していく。

第二に、拙著は、田中が対中国交正常化に至るまでに、実際にどのような政策を実行することによって台頭していったのかの過程を見る。吉田茂、岸信介、池田勇人、佐藤栄作、この四人を中心に自民党の変遷や派閥の消長を見ながら、田中が政策実行能力をいかに示すか、どのような権力を掌握していったのかの過程についても論じる。とりわけ、田中が深く関わった議員立法、テレビの大量予備免許の許可、財政政策、社会開発政策、日米繊維問題、外交政策を取り上げる。議員立法については「道路三法」の成立の経緯、財政政策に関連しては池田・佐藤内閣期における高度経済成長政策とその見直しの経過について明らかにする。社会開発政策については、土地・住宅問題や『都市政策大綱』の作成過程における田中の政治指導に着目する。『都市政策大綱』の作成については、田中が内政において国土の復興と格差の是正を実現しようとしていたことを示すのは最も良い例である。日米繊維問題については、従来ほとんど研究されていない、田中が中心となって進めた日米繊維交渉の経緯について触れる。また、拙著は、田中が権力を掌握していく過程において、田中政治がもたらしたマイナス面も含め、田中政治全体を見渡しながらか検討していきたい。

第三に、拙著は、田中角栄と彼の最大のライバルであった福田赳夫の政治指導や政策面、とりわけ中国問題における捉え方の違いにより、田中がどのようにポスト佐藤の有力候補としての立場を確かなものにし、最後に福田を打ち破り、首相の座に就くことができたかを見る。

福田は、一九〇五年に群馬県群馬郡金古町(現在の高崎市足門町―筆者註)に生まれ、第一高等学校、東京帝国大学法学部を卒業した。一九三〇年に、高等文官試験一番の成績で大蔵省に入省し、主計局で順調に出世し、銀行局長や主計局長までのぼりつ

めた。一九五二年の第二五回衆議院議員総選挙で、福田は群馬三区から無所属で立候補し、初当選を果たした。「エリート官僚出身」という道を歩んでいた福田は、万事にソツがないが、頭が高く、人間味に欠け、ともすると陰険で冷たいという印象を持たれており、新潟から叩き上げで這い上がってきた庶民家・人情家というイメージの田中とは、全く対照的な政治家であった。一九五三年に自由党に入党した後は、福田は岸信介に仕え、岸派が分裂した際、その大半を引き継いで福田派を率いていくことになった。一九六〇年一二月、福田は池田勇人政権の下で政調会長に就任したものの、「高度経済成長政策は兩三年内に破綻を来す」と池田首相を厳しく批判した。それは池田内閣への協調を重視する田中と対立していく。

佐藤栄作内閣期において、田中は福田とともに佐藤に引き立てられ、相互に自民党幹事長や閣僚の重要ポストに据えられた。福田は、「自民党のプリンス」と呼ばれ、ポスト佐藤の最有力候補として見なされ、後継首相の座を目指す田中にとっては最大のライバルとなった。田中は、土地・住宅問題、日米繊維問題をめぐって、福田と主導権を争いながら台頭し、最終的に「対中国交正常化」を掲げ、盟友である大平正芳とともに、福田を孤立に追い込み、自民党総裁選で勝利していく。そのような田中と福田との政治家としての対決の一側面を表すため、拙著は、大平が後に会長となった宏池会の動向についても検討を加え、田中-大平ラインの形成が田中の政権掌握にどのように作用していったかについても検討する。

第四に、田中角栄の選挙活動を見る。田中は、初出馬した一九四六年の第二二回衆議院総選挙に落選した。田中がこの落選からどのような教訓を得て、次回に当選を果たし、その後の安定した当選に結び付けていったかについても分析する。田中の選挙

基盤がいつ頃から安定し、それが田中の自民党内での台頭にどのように影響していったのかについても注目する。

拙著は、国立公文書館、外務省外交史料館、中国外交部所蔵の公文書、国立国会図書館憲政資料室の、従来体系的に活用されてこなかった未公刊史料、日記や回顧録、国会の議事録などの公刊史料を積極的に活用する。それとともに、自由民主党機関誌『自由民主党』、有力全国紙である『朝日新聞』『読売新聞』『日本経済新聞』、田中の地元の有力紙である『新潟日報』、有力総合雑誌『中央公論』『文芸春秋』、それらに加え、中国側の『人民日報』『文匯報』『参考消息』などの新聞、雑誌の記事からも田中に関する史料を積極的に探索する。

目 次

第1章 政党政治家以前の田中角栄	1
1.1 田中角栄の生い立ち	1
1.2 第二二回衆議院総選挙における田中角栄の初出馬と 選挙活動	7
1.3 第二三回衆議院総選挙と田中角栄の初当選	14
第2章 吉田茂内閣、岸信介内閣、池田勇人内閣における田中角 栄の政治指導	19
2.1 吉田茂内閣期における田中角栄の成長	19
2.2 岸信介内閣と田中角栄郵政大臣	45
2.3 池田勇人内閣における田中角栄の協調	52
第3章 第一次、第二次佐藤栄作内閣と田中角栄	75
3.1 第一次佐藤栄作内閣の政権運営	75
3.2 佐藤第一次改造内閣と田中角栄の幹事長就任	78
3.3 第二次佐藤栄作内閣と田中角栄の『都市政策大綱』作 成	85

第4章 第三次佐藤栄作内閣と日米繊維問題	95
4.1 日米繊維問題の政治的背景	95
4.2 日米繊維問題をめぐる田中角栄と福田赳夫の対立	100
4.3 日米繊維問題における田中角栄の政治指導	104
第5章 対中国交正常化気運の高揚と田中角栄	112
5.1 佐藤四選と田中角栄	112
5.2 米中接近と田中角栄	117
5.3 日中問題における福田赳夫との対決	126
5.4 大平正芳の動きと田中—大平ラインの構築	134
第6章 田中角栄内閣の成立と中国	142
6.1 自民党総裁選と田中角栄の勝利	142
6.2 田中角栄による組閣工作	150
6.3 中国側の田中角栄内閣成立への対応	155
第7章 田中角栄と対中国交正常化への道	159
7.1 田中角栄による自民党内の根回し	161
7.2 野党を用いる田中外交の展開	171
7.3 日米首脳会談と中国台湾への特使派遣	186
7.4 対中国交正常化交渉とその後	192
おわりに.....	200
参考文献.....	211

第1章 政党政治家以前の田中角栄

1.1 田中角栄の生い立ち

1.1.1 田中角栄の幼少・青年期

田中角栄は一九一八年(大正七年)五月四日、新潟県刈羽郡二田村大字坂田(現・柏崎市―筆者註)に父―田中角次、母―フメの次男として生まれた。兄は幼少で亡くなったので、角栄は、長男に繰り上がり、田中家唯一の男子とし、「家中の宝のようにそだてられた」^{[1]9}。角栄という名前は、家を栄えさせるという親の願いから付けられたかどうかは確認できないものの、生まれたときから、周囲に大きく期待されていたのは確かである。

田中の生まれる前の年には、後に中華人民共和国の総理となった人物は、日本で留学していた。それは周恩来であった。周恩来は、留学生生活が二年と長くなかったものの、日本に滞在中、勉学に励むほか、日本社会や日本人について積極的に観察していた。この体験は、後に、周恩来が知日派として行動したことのベースを作ったのである^{[2]42-44}。後述する田中の中国での苦

い戦争体験と、周恩来の日本での留学経験は、一九七二年の中日国交正常化交渉における二人の対面を運命づけていたかのよう
に思われる。

田中家はそもそも貧しくなく、むしろ経済的には比較的恵まれていたほうであった^{[2]16}。しかし、五歳か六歳のころ、父・角次の事業が失敗したのを境に、田中家が借金だらけとなり、田中は貧乏な少年時代を送ることを余儀なくされた^[3]。一九七〇年代に入って政権を争うことになった福田赳夫、三木武夫に比べると、田中は「讃岐の貧農の倅」と称される大平正芳とともに厳しい経済家庭環境の中に育っていた。そして、幼少時の厳しい家庭の事情が後に田中と大平の二人を結びつける要因の一つとなったことは確かである。

父一角次はいわゆる学歴はなく、事業も失敗に終わったが、「金の有無はさして気にかかるでなく、まことに平淡としていた。威張らず卑下もせず、その豪放磊落は、まさに百万長者然としていた」という^[4]。後に、田中の折々の言動に示された楽天的で豪胆な性向は父親譲りであったといえよう。祖父一捨吉は、神社や寺を建てる宮大工の棟梁として知られており、土木建築一式を請け負っていた。田中は、祖父から土木建築や事務の才を受け継いだと考えられる。

田中は、一九二五年(大正一四年)四月に二田尋常小学校に入学した。小学時代の田中は、「至誠の人、真の勇者」「自強不息」「去華就実」という草間道之輔校長の三つの校訓に、自らの座右の銘にしたほど親しんでおり、「人間を信頼せよ」という道德論を掲げる草間を「終生の恩師」と仰いだ。これから田中が政治家として大成していくのに、人間を信頼する楽天的性格は大きな財産となる。後に、田中は、大河内正敏・幣原喜重郎・吉田茂・岸信介・池田勇人といった、出自のまったく異なる人々に信頼さ

れ、大平正芳を生涯の親友とし、佐藤栄作の腹心となる。多くの人々を引き付けた田中の人間的魅力は、拙著で具体的に述べていくように、誠実で楽天的な性格で、現実的に対応できえる柔軟さとともに、容易にぶれない理念があったことである。

田中は、エリートの世界に強烈なあこがれがあり、海軍兵学校に進学し、海軍士官となることを望んでいた^{[1]132}。それは、田中が幼少期から田中家唯一の男子として厚く期待され育てられたからであろう。一九三三年、田中は二田小学校高等科を卒業し、翌年に単身で上京した。田中は、当初、海軍兵学校の予備校とされた旧制海城中学校への入学を目指した^[5]。田中自身の回顧録によれば、彼は旧制海城中学校に編入するつもりであったが、学費を払えなかったで、住み込みで井上工業で働きながら、神田の中央工学校土木科に通っていたそうである。

九・一八事変以降、日本の若い世代の中に、入隊する人は増えていたのである。田中は、当時、特に海軍軍人になりたいと考えた動機を、「巡洋艦の艦長が望まれる最高の夢であった」「徳富蘆花の『不如帰』の主人公一川島武男の海軍士官としてのさわやかな男らしさにあこがれたことが第一かもしれない」^{[1]132}と回想していることに求められよう^{[1]21-22}。戦前の日本では、旧制中学校から旧制高等学校を出て、帝国大学を卒業し、財閥系の企業に入って高級官僚となるのが第一のエリートコースであった。しかし、多額の学資を必要とし、田中のような貧しい農村の子弟が進学することは困難であった。これに対し、陸軍士官学校と海軍兵学校は学費がかからず、衣食住が保障されたので、貧しい農家出身の田中が立身出世の手段として海軍兵学校を目指したのは自然なことである。しかし、陸軍士官学校や海軍兵学校に進学するためには、旧制中学へ進学しなければならなかった。当時、中学に進学できるのはごく一部の恵まれた家庭の子供だけ

であった。結局、経済的な理由で海軍士官になるという田中の夢はかなわなかった。このような経験を通し、田中の中で、エリートに対するコンプレックスが形成されたと思われる。

一九三六年三月、田中は中央工学校土木科を卒業し、理化学興業会社(以下、「理研」と称する)の仕事を請け負う中村勇吉事務所に設計技術者として就職した。田中の仕事振りは理研の大河内正敏社長に認められた。大河内の実父は旧上総大多喜藩主で、正敏自身、爵位を持ち、貴族院議員を務めていた^[6]。また、彼は東京帝国大学教授を務めた物理学者であり、進取の精神に富む実業家でもあった。子爵・科学者・技術者・実業家としての大河内との出会いは、田中の人生における最初の大きな転機となった^[7]²⁹。一九歳の田中は、一九三七年三月に「共栄建築事務所」を設立し、当時墨田区にあった日本特殊機械の新工場や機械の据付工事を受注した。このように、田中は若くして実業家の道を歩み出したのである。田中は大河内について、「戦前、戦中、戦後をつうじ、私の少年期から青年期にわたる人間形成に、もっとも大きな影響を与えた人である」と回顧している。大河内は、一九三六年に書かれたとされた「多望な農村工業の前途」という論文の中で、「農村工業論」を唱え、農村工業を発展させることで農村の余剰労働力を吸収し、人口流動現象を逆転させる構想を示していた^[8]。このように、田中は大河内を通し、「地域格差是正」の思想に触れたのである。敗戦後、田中は、「農村工業論」を「国土復興」と「格差是正」を実現するための一政策として位置づけるに至った。後に、田中は、首相を目指す時期に、農村地域に第二次産業を配置する構想を掲げたのは、大河内との出会いに胚胎していた。

1.1.2 軍人時代と苦い戦争体験

田中は、一九三九年三月に徴集兵とし、盛岡市に設置されていた騎兵第三旅団第二四連隊第一中隊に入隊し、中国の黒竜江省富錦へ赴いた^{[7]30}。悔しくも海軍士官になることを断念し、実業家として軌道に乗ろうとした田中であつたが、軍隊生活では、酒保(部隊内部の売店—筆者註)、糧秣などの勤務に当てられ、その中で古参兵にひどい暴力を振るわれるなどの屈辱的な体験も味わつたようである。

一九三九年五月から九月にかけて、「諾門罕戦役」が勃発した。田中の入隊した騎兵二四連隊から、古兵の半分以上が動員されたので、田中は多くの戦友が戦死するのを目撃した。田中は、実戦には直接参加しなかったものの、「戦争の激しさが身にして理解できた」と回顧している^{[1]22}。戦時中汪兆銘政権の財務顧問を務め、一時中国に滞在したものの、軍人としての出兵経験がなかった福田赳夫に比べると、田中は二二歳にして従軍した一兵卒とし、戦争の悲哀を知っていた。

田中は、一九四〇年十一月、酒保勤務中、クルップス肺炎のため倒れ、そのまま入院し、一時、危篤状態に陥つたが、奇跡的に生還した。一九四一年二月に、田中は、日本へ帰還することになった。四年後、日本が戦争に敗れ、生き残った田中は幸運であつた。シベリアに連行された人々には、多くの犠牲者が出た。その後、田中はソ連について、しばしば「北方の白熊」といった言葉を口にした^{[9]245}。また、対中国交正常化の際、田中は毛沢東に対し、ソ連に対する不信感を隠さなかった。田中がソ連に対して嫌悪感を抱いたのは、恐らく日ソ両軍が衝突した「諾門罕戦役」事件に一人の兵士として関与した記憶と無関係ではないように考えられる。